

杉野一博 選

春待つや子ら軒下に纏れぬて

子らの動きに季節も新しい胎動を見せる

上澤孝二

靴底に凍てつく音は我が祖国

「音や」と切って思いを広げた方がいい

山本俊郎

二歳児に拍手教へ初社

「教へ」と自分が出るのではなく、その拍手を「そろふ」などと

木宮節子

ラカンパネラうたう煮凝り真夜の音

煮凝りの挿入よく解らない

滝沢慶子

山頭火七草粥に読始

季語重なる(また始から読始 など)

山本俊郎

雪が来て北の男の貌となり

男の貌が効果的(北は)と焦点を絞っては

伊東次雄

この命生きねばならず玉子酒

直情径行は短詩形では目立ち過ぎると思う

木宮節子

鏡餅午後は次第に湾の上

かつて船が揃っていた時の鏡餅へ想像ひろがって

杉野一博

吹雪けども話合ってるトド松語

(椴松話し合っている)でいいのでは

森山圭悦

日輪もひと息入るる冬至かな

冬至なのにひと息入れたのが面白い

伊東次雄

彗星の消えし宙なり去年今年

時の話題さりげなく

船矢美雪

小寒や肖像画から下りてくる

小寒の緊張感 人物が肖像画から下りてきた

杉野一博

撒き餌待つ丹頂に朝の日のおよび

よくみる情景がきれいにまとめられている

松原智津子

幾つもぞなき山河かな斧始め

上五力入っているが斧始めていきかと思う

上澤孝二

海彦と山彦と逢う雑煮椀

雑煮椀では当然ということになってしまふ

船矢美雪

雪道や三馬印の暖かさ

ミツウマゴム長の懐かしさ

森山圭悦

外国の言葉飛びかふ雪祭り

雪まつりではもう当たり前になっている

森山圭悦

舞ふやうな手話の女の御慶かな

手話へ視線を伸ばした効果充分

松原智津子

御慶かな街にたなびく鐘聞きて

季語と少し付くかとも思うが

滝田慶子

松過ぎのドアと耶蘇教信徒かな

少し意外性にうたれたのであるう

上澤孝二

淑気満つ藍より青き千木の空

中七の表現上手

松原智津子

新年会あと七年といふ言葉

中七(あと七年)で解るはず

木宮節子

初山河すがめてみたるリュックかな

リュックの俗なものが効果たかめている

滝沢慶子

ニコライ堂冬の箱館記憶かな

記憶を(よみがえり)とすれば動きが出る

山本俊郎

去年今年森羅万象流れ星

大雑把すぎる どこかに具体物を

伊東次雄

縄文の石笛澄し初日の出

遠くからの音がきこえてくるよう

船矢美雪

寒卯朝が廊下と曲がりくる

寒卯の緊張感をふかめたかった

杉野一博